



地域ボランティアプログラム①
松木日向緑地プログラム

里山保全ボランティア
～首都大で竹を切ろう～

報告

2018/12/16

里山保全ボランティア～首都大で竹を切ろう～

12月16日(日)、本学の敷地内にある松木日向緑地にて、「里山保全ボランティア～首都大で竹を切ろう～」と題し、里山保全活動の体験会を行いました。松木日向緑地プログラムからは、3年目(リーダー)の学生が2人、2年目(サポーター)の学生が2人、1年目の学生が5人の合計9人が参加しました。

・準備

今回の体験会は、松木日向緑地プログラムに所属している学生たちがこれまでの活動での気づきや各々の考えを共有し、整理したうえで、目的や内容について話し合い、企画しました。昼休みに教室に集まって話し合いを重ねた結果、近隣の中学校の生徒と首都大生を対象に参加を呼び掛けることに決めました。

今回は、残念ながら首都大生の参加応募はありませんでしたが、近隣中学校から4名の中学生が参加してくれました。

・活動内容

13号館前に集まり、大学生、中学生、地域の方、参加者全員で自己紹介をしました。大学生も中学生もお互いに緊張している様子で、最初はなかなか会話が続き、ぎこちないスタートとなりました。ケガをしないようしっかりと準備運動を行った後は、道具の準備をします。竹を伐採する時にはヘルメットやのこぎり等の道具を装備しますが、のこぎりを腰に装着する際にベルトを巻いてあげる等、大学生は積極的に中学生の準備を手伝っていました。

今回、竹の間伐を行ったのは、サル山の裏手にある竹林です。太い竹が生い茂っている中で、まず大学生が、松木日向緑地の現状や課題、なぜ竹を切る必要があるのか等、中学生に向けて丁寧に説明しました。中学生は、身近な自然環境の中にある課題を知り、今回の体験会で行う活動の意義について理解したようです。全体での説明が終わると、安全な竹の伐採方法について、大学生がお手本を見せながら伝えました。

ここからは、グループごとに竹の間伐体験を始めます。安全に十分配慮し、まずは、中学生が竹の間伐に挑戦しました。最初こそ、自分の背丈の何倍もある竹を目の前にして不安そうに

していましたが、道具の使い方も上手で、切り始めるとあっという間に竹を倒していました。竹を倒す方向やのこぎりを入れる角度など、大学生のアドバイスも的確で、素晴らしいサポートでした。その後も、大学生と中学生でお互いに協力しながら、竹の間伐を行いました。

切った竹を温室に運び終えた後は、昼食の時間です。お昼ごはんを食べながら、好きな教科や部活の様子など、中学生と大学生が楽しそうに話していました。

昼食後の活動では、切った竹の活用方法を考え、実際に竹を使って工作をしました。

中学生が自ら考案し、作成したのは、「ギロ」と「ネームプレート」です。「ギロ」とは、細い棒で表面の溝をこすり音を鳴らす打楽器です。一般的には、ひょうたんの中をくり抜き、その表皮に刻み目を入れて作りますが、今回は竹を使ったギロの製作に挑戦しました。のこぎりで太い竹に一つ一つの溝を掘っている時は、とても大変そうでしたが、無事に出来上がると、素敵な音が鳴り、作った本人たちも嬉しそうでした。

大学生は、中学生の工作をサポートしながら、新たな竹の活用方法を考えた中学生の発想力の豊かさに感心していました。

～参加した学生の感想～

・「初めて竹を切ったので、中学生に教えるという事はあまりできなかったが、同じ初めて同士で感想を共有することができた。工作では、今までだれも思いつかなかったギロを作るという発想が出て、世代を超えて関わる意義があったと感じた。」

・「中学生にもなると発想は自由だが、道具の使い方は小学生より上手いため、小学生の工作とはまた違うものを見られておもしろかった。大学生の参加者がいなかったのは残念だったが、様々な年齢の人と交流することの意味を実感した。」

・「今回は初めて中学生を招いての活動だったが、新しい活動を考えるきっかけになったと思う。中学生の発想は非常にユニークで、固定観念に縛られないことの必要性を感じた。」



グループごとに自己紹介をしている様子



中学生が竹を切っている様子



中学生と大学生が「ギロ」を作っている様子



集合写真